

### 第3章 研究の成果と今後の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00064698">https://doi.org/10.24517/00064698</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



### 第3章 研究の結果と今後の課題

西多由貴江 瀬戸禎乃 草場勇介 米林加織  
沖田美優 亀田有紗 高瀬茉莉子

#### 1. 研究の結果

3歳児から5歳児の各視点の事例から得られたキーワードを、KJ法を参考に整理・分析してその要素を抽出した。整理された要素と各抽出児の1年を振り返った様子と合わせて、各視点の発達の様相について考察した。

##### (1) 探究心について

###### 探究心の発達の様相

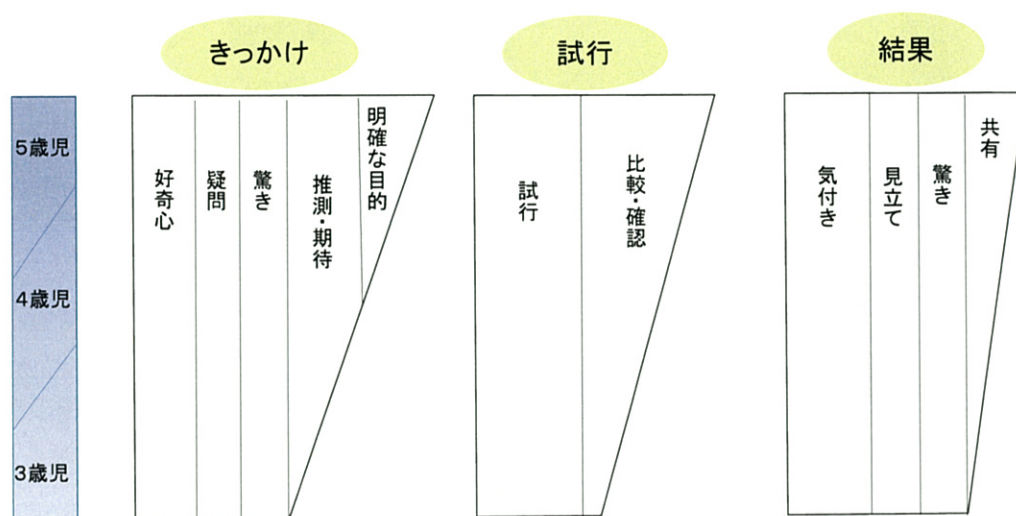


図1 探究心の発達の様相

探究心には「きっかけ」「試行」「結果」の3つの段階があり、3歳児から5歳児にかけてそれぞれにおける要素が多様になっていくことが明らかとなった。

「きっかけ」は好奇心、疑問、驚き、推測、期待、明確な目的を、「試行」は試行、比較、確認、「結果」は気付き、見立て、驚き、共有という要素を含む。「きっかけ」は3歳児では好奇心や疑問、驚きという心の動きが主だったが、発達に応じて今までの経験から推測したり期待をもったりして探究が始まっていくことが増え、時には明確な目的をもって探究を自ら進めていくこともある、といった変容が見られた。「試行」については、推測したり目的をもって取り組むなど、前もって考えることが増えていくことで、比較したり確認したりといったより具体的な操作になっていくことが分かった。「結果」は新たな気付きを得たり見つけたものを何かに見立てたりして遊びが続いていく姿であり、発達に応じてその気付きや驚きを教師や友達と共有するようになっていくことが分かった。それは発達に応じて友達や教師との関わりが広がり関係が深ま

っていくことが影響していると考えられる。また、何度も「試行」と「結果」を往復したり、「試行」しながら新たな「きっかけ」を得たりと、それぞれの段階を行き来しながら好奇心が持続していくことも明らかとなった。

(2) 自己主張について

自己主張の発達の様相

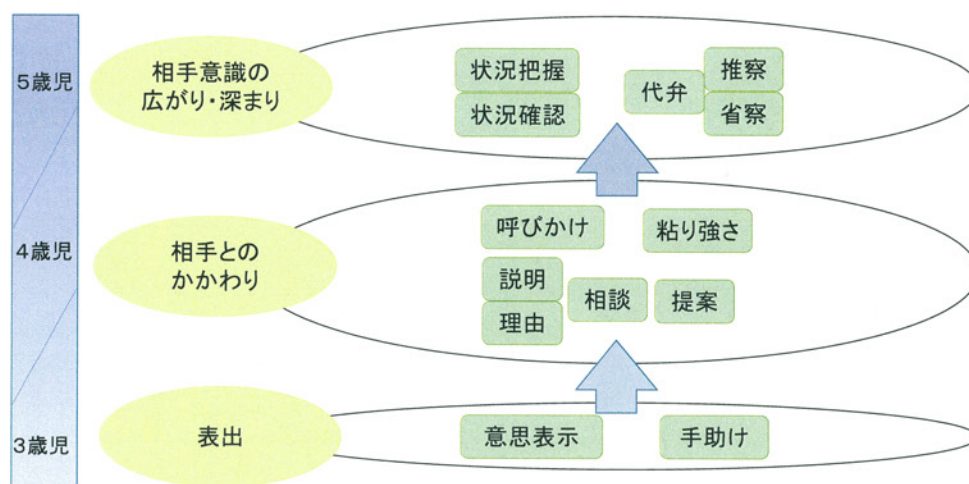


図2 自己主張の発達の様相

自己主張の発達の様相として、自己主張には「表出」「相手とのかかわり」「相手意識の広がり・深まり」という段階があり、発達に応じて段階を踏んで変化していくことが明らかになった。

「表出」は意思表示と手助け、「相手とのかかわり」は説明、理由、相談、提案、呼びかけ、粘り強さ、「相手意識の広がり・深まり」には状況把握、状況確認、代弁、推察、省察といった要素を含む。「表出」は自分の意思をとにかく表わしている姿、教師の手助けを待っている姿であるが、「相手とのかかわり」が生じてくることによって次第に自分の意思を相手に表現するようになる。相手に説明や提案をし、時には多くの友達に呼びかけたり、粘り強く何度も自分の思いを伝えたりすることができるようになっていく。そして、「相手意識の広がり・深まり」により、状況を把握して行動したり、相手の思いを代弁したり推察したりするようになっていく。自己主張の発達の様相としてこのような流れで捉えることができた。

(3) 自己抑制について

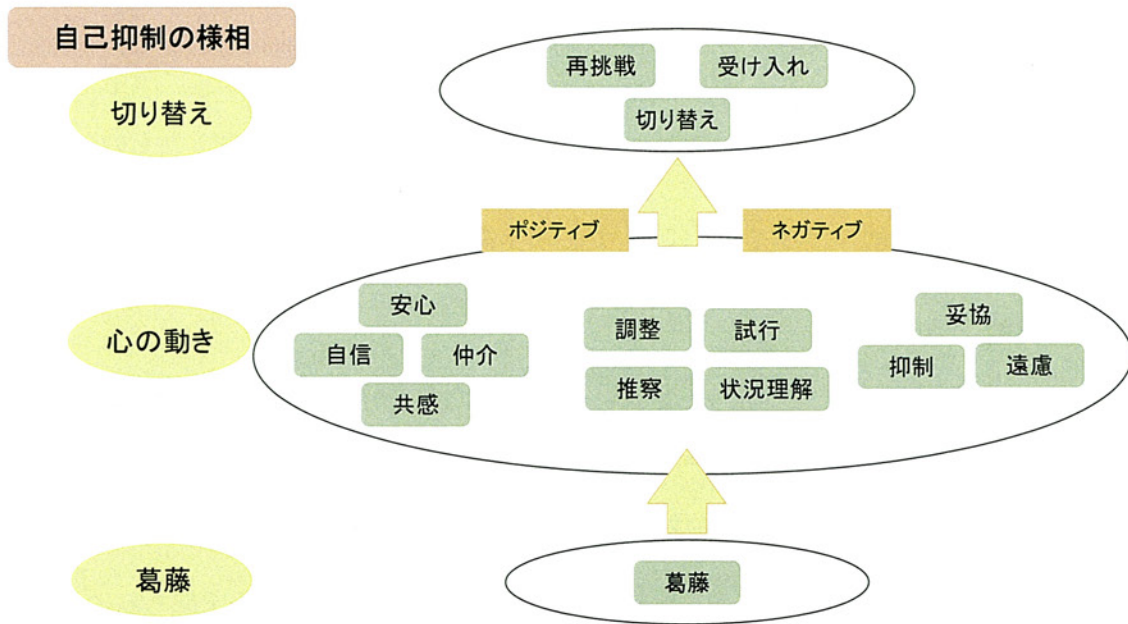


図3 自己抑制の様相

自己抑制の様相としては、「葛藤」「心の動き」「切り替え」というまとまりで捉えることができ、「葛藤」により「心の動き」が生じ、それを整理したり解決したりして「切り替え」ていくことが明らかになった。

「心の動き」には要素として安心、自信、仲介、共感というポジティブな傾向のものや、妥協、抑制、遠慮というネガティブな傾向のもの、調整、推察、試行、状況理解といった気持ちの整理や解決への試みが含まれる。「切り替え」には切り替え、受け入れ、再挑戦という要素が含まれている。しかし、自己抑制については、探究心や自己主張とは異なり、年齢による差や種類の違いを見出し、発達の様相を明らかにすることはできなかつた。その理由としては、自己抑制が幼児の心の動きそのものであり、その心の動きを十分に捉えることができなかったことが考えられる。幼児にとって自らの葛藤や心の動きを言葉で表現することは難しく、教師は幼児の表情や態度からもその心の動きを読み取っていくことが必要であるが、幼児の心の動きを過不足なく読み取ることが不可能であるということをも前提としても、その読み取りが不十分であった可能性がある。また、自己抑制の定義を「自分の気持ちを抑えて行動すること」としたが、その定義の理解と、気持ちを抑えている様子とその後の行動までを観察することについて、職員間の共通理解が不十分であったことも考えられる。



## 2. 今後の課題

本研究では、社会情動的スキルの内の「探究心」「自己主張」「自己抑制」の3つの視点における発達の様相について明らかにすることができた。しかし、それらの発達においてどのような環境の構成や教師の援助が大切であるのかについて、各抽出児については考察したものの、それらをまとめ、結論を導くには至らなかった。「探究心」「自己主張」「自己抑制」の発達をどのような環境の構成や教師の援助で促していけばよいか、引き続き探っていく必要がある。

### 引用・参考文献

- 池迫 浩子・宮本 晃司 (著) ベネッセ教育総合研究所 (訳) (2015). 家庭, 学校, 地域社会における社会情動的スキルの育成——国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆—— ベネッセ教育総合研究所
- 文部科学省 (2018). 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申)